



ろう。茅嶋氏はこのような環境で1日40～50枚の読影レポートを作成している。「患者さんのためになる当院のような施設の存在を、より多くの人に知ってもらえるようにアピールしていきたい」と抱負を語る。

### 画像のダブルチェックが 大きな安心感を生む

連携の実績としては、メディカルスキニング全体ですでに数千施設から紹介患者を受け入れている。実際に、画像診断を依頼している診療所からすると、メディカルスキニングはどのような存在なのか。



阿保 義久 院長

「専門の読影医が画像を読み、さらに自分自身でも確認するため、画像のダブルチェックができることが連携の大きなメリットです」。メディカルスキニングと積極的な連携を進めている北青山Dクリニックの阿保義久院長の言である。北青山Dクリニックの開業は2000年。患者さんの負担を大幅に軽減するための“人間ドック”などをコンセプトとした診療所として開業した。スペース的な問題もあり画像診断装置は置いていないが、メディカルスキニングと連携をとることで最新鋭の装置による画像診断の提供を実現している。「メ

ディカルスキニングは、都心の各主要駅近くに立地しておりアクセスが非常によいため、患者さんにも喜ばれます」(同)。依頼元の主治医は、患者の状態や検査目的等を記した「診療情報提供書」をメディカルスキニングに提供し、検査を依頼する。

「開業以前、都内の病院で外科をしていましたが、救いきれない症例を数多く経験しました。そんな中で、患者さんにとって最良の医療を提供できる診療所を自分で作りたいと思ったのです」。そう語る阿保院長が連携のパートナーとして選んだ医療機関がメディカルスキニングだったわけだが、その最大の理由はどこにあるのか。「実際、他の画像診断施設からもいくつかお話がありました。しかし、機器のクオリティーやコミュニケーションの取り方など、色々とお話する中で最も手ごたえがあったのがメディカルスキニングでした。特に診断装置のクオリティーへのこだわりの強さには満足しています」(同)。

予防医療に力を入れる以上は画像診断を行える医療機関との連携は不可欠。しかし「画像診断の患者さんを大学病院に紹介しようという気持ちは最初からありませんでした。私も大学病院にいましたからわかりますが、大学で画像診断を優先的に行うと、診療が遅れ機能しなくなってしまう。検査のための画像診断は大学病院の担う役割ではないのです」と阿保院長。現在、北青山Dクリニックからは、MRI、CTの患者を毎日1～2例程度紹介しており、メディカルスキニングとのスムーズな連携を図っている。

### 連携先双方が求める 一層のコミュニケーション

患者さんの利便性が増し、医師の士気が高まり、誤診も減る。申し分のないシステムのように思えるが、メディカルスキニングを中心とする連携に、あえて課題をあげるとすれば、そ